**曹洞宗大本山總持寺・ニコニコ法話　　　　　　　　　　　　　　　　　　令和6年3月**

**天真に任す**

**本山布教教化部長　花和浩明師**

2月下旬になると、大本山總持寺の境内に桜の花が咲き始めます。初めは、控えめな江戸彼岸桜、次に少し賑やかな河津桜、3月になると奥ゆかしい深紅の緋寒桜、中旬以降は、華やかなソメイヨシノ、おおらかな大島桜、4月になるとあでやかな八重桜と桜のリレーが続きます。

その中でも、境内で一番の春爛漫の装いを見せるのがソメイヨシノではないでしょうか。私たちは満開の姿に我が人生の謳歌を夢見ます。そして散り行く姿に、人生の儚さを重ねます。

ソメイヨシノというと、私はある人のことを思い出します。それは私の小中学校の同級生の父親Aさんのことです。とても優しい方で、家に遊びに行くととても喜んでくれて、たまにはラーメンなども作ってたべさせてくれました。

Aさんは町役場の土木課に勤めていて、土地改良の事業に携わっていました。事業の一環として地元の広大な田園地帯の一角に桜並木を造成することとなり、それを主導する立場で働いていました。

当時Aさんはガンにおかされていて、ほどなく私たちは訃報を耳にすることになりました。Aさんが亡くなられてしばらくたったころ、Aさんの奥さんが当時住職だった私の父のもとを訪ねてきました。私もお話を一緒に聞くことになりましたが、奥さんは「主人は、自分が手掛けた桜の花が咲くのをとても楽しみにしていたんです。病状はかなり悪かったんだけど、先生に無理を言って、車いすに乗せて満開の桜を見に行ったの。主人は本当に満足して心から喜んでいました。」とお話してくれました。

私も、初めて満開の桜並木を見た時には、まだ初々しい低木ながら、生きる希望を強く感じさせてくれる姿にとても感動しました。その桜並木は、それから30年の歳月を経て、今ではすっかり地域になじみ、春の訪れとともに市民の憩いの場所となっています。

「天真に任す」という良寛和尚の言葉があります。「天（自然）の道理は、人間の計らいをはるかに超えたところにある。私たちは、あえて自らの思いを手放して、天（自然）の働きに素直になってみる方が、むしろ道は開けるのである」と私は理解しています。

どんなに厳しい冬の時代があっても、何事もなかったように、毎年私たちに春の訪れを気づかせてくれる桜の花を見ていると、私はいつもこの言葉を思い出します。